

第108回 日文研フォーラム



化粧の文化地理

A Cultural Geography of Cosmetics



島崎 博

Hiroshi SHIMAZAKI

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

化粧の文化地理

A Cultural Geography of Cosmetics

● 発表者 ●

島崎 博

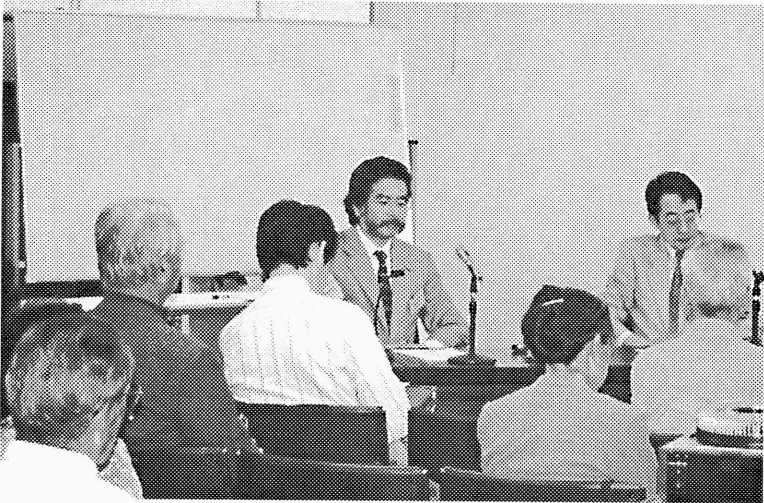
Hiroshi Shimazaki

レスブリッジ大学教授

Professor, University of Lethbridge

国際日本文化研究センター客員教授

Visiting Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies



1998年6月9日(火)

発表者紹介

島 崎 博

Hiroshi Shimazaki

レスブリッジ大学教授

Professor, University of Lethbridge

国際日本文化研究センター客員教授

Visiting Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

- 1943年 東京都出身
1975年 サイモン・フレーザー大学（カナダ）博士号取得
1988年～ レスブリッジ大学（カナダ）教授
専攻 文化地理学、比較経営学
1994年 カナダ首相出版賞受賞
1981年～ 関西学院大学、国立民族学博物館、東京大学、お茶の水女子大学、千葉商科大学、Universidad Panamericana、IPADEなどで客員教授・研究員をつとめる。

主な著書：

- 「カナダの土地と人々」（古今書院、1994年）
「巡礼地の世界」（古今書院、1983年）
「セコムの新連邦経営」（共著、毎日新聞社、1992年）
『*Vision in Japanese Entrepreneurship*』 London: Routledge, 1992.
『*Personality in Industry*』 London: Pinter Publishers, 1988.
『*The Human Side of Japanese Enterprise*』 Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1988.
『*La Filosofía del Éxito*』 Mexico City: Grupo Noriega Editores (Limusa), 1994.
『*Asian Landscapes*』 Lethbridge: University of Lethbridge, 1977.

はじめに

今日は「化粧の文化地理」というタイトルでおはなしさせていただくわけですが、私は化粧を専門に研究する者ではなく、また特に化粧とか美容に気をつけている者でもありません。ただ、最近の研究の副産物として化粧に興味をもちました。

私は、地理学者のはしくれとして、それなりに世界を狭い範囲内でみつめてまわりました。ここ数年来の研究対象地域は中米です。メキシコ南部からパナマにかけてのこのアメリカ大陸のくびれでは、じつに多くの興味深い歴史的出来事がありました。今日はその詳細について語ることはできませんが、ひとつの事物が今日のテーマ「化粧」への興味をかきたてました。それはラテンアメリカにおけるスペイン植民地時代の大事な交易品のひとつだった「コチニール」という染料です。これは、サボテンに寄生する小さなえんじ虫の体液からつくられた動物性の赤紫色染料です。インディオやスペイン人は、これを衣服、建築、工芸、そして化粧へと広く活用いたしました。いずれにせよ、ここから中世以前の化粧のいろいろに興味をもちました。

ただし今日のフォーラムは、それを系統的にまとめたわけではありません。内容は、古代から中世にかけての化粧風俗史の表面をかじる程度と見なしていただければ、と思います。舞台は日本をふくめた世界です。ただし、日本に関するコメントはきわめて限られたものですので、あとで皆様から色々教えていただけるのを楽しみにしてまいりました。

「化粧」という日本語のことばや、それに匹敵する外国のことばの由来や意味には、いろいろな解釈や視点があるようです。今日は「化粧は、人間がある目的をもって身体の表面にほどこす文化行為」と広く解釈して、はなしを進めたいと思います。

自然環境への対応

化粧は人間の心に、大きな満足と悦びを与えるようです。化粧を通した美的観念の発達、それに結びついた自己満足や自己顕示の欲望は、人間の行動の一原動力でありました。

本来、裸でこの世に生まれてくる人間は、いつ頃から化粧をするようになった

のでしょうか。その起源は人類の発生に起し「化粧の歴史」は「人類の歴史」にそって流れてきた、といえそうです。きびしい自然環境から身を守るという目的で、我々の祖先は、氷河期にはすでに化粧をしていたのでしょうか。

現在、私が生活するカナダの北極圏では、冬に気温が零下六〇℃にも下がります。そこでは、顔や体に油をぬる風習があります。イヌイット（エスキモー）が、あざらしや鯨からとった油をぬる習慣は、肌を保護せねばならない必要性から生まれた生活の知恵です。チベットの寒冷高地に住む女性は、皮膚の保護と美容のため「アダ」とよばれる動物性の油脂をつけます。

ティエラ・デル・フエゴは、南米の南端にあるアルゼンチンの群島です。ここは一年中、霜のおりない日はない程の寒冷地です。かつて白人が出会ったこの地の原住民は、簡単な毛皮の着衣をつけるのみで、ほとんど裸に近い状態で生活していました。それが可能だったのは、保温のため、にしんの油と粘土を混ぜたものを体に塗りつけたからだとされます。寒冷地の住人は、環境に見合った寒さに強い肌を発達させると言われます。

一方暑い地方も、それなりの問題があります。南方の住人は、ココナッツ、オリーブ、やしの油で肌を守ります。しかし移住者は、高温乾燥地へのトラブルに

遭遇します。オーストラリアに移住した白人の肌は、それなりの化粧をしていても、太陽の紫外線におかされやすく、皮膚ガンの大きな原因となっているようです。

高温乾燥地では、灼熱の太陽から身を守るのは、皮膚に何かを塗る方法では効果がうすく、衣服で体をつつみ、日陰を作らねばなりません。アラブ人の伝統的服装は、その一例です。

ただ顔や頭を覆うベールは、環境への対応というより他に起源があるようです。それは回教の創始者モハメッドの生存中に普及した風習である、といわれます。モハメッドは何人もの妻をめぐっていました。彼は妻たちに「人前にでるときは、その美しい顔をおおってくれないか」と言ったのかもしれない。彼女達は、ベールをまとった初期のアラブ人だったそうです。それを他の女性が真似しベール着用の風習が普及した、とされます。ベールの普及にともない、アイシャドウとアイラインからなる目の化粧は、アラブ女性の神秘的な美しさをさらに高めることになりました。

目の化粧

アイシャドウをつけ、アイラインを引くという目の化粧は、今日世界各地でみられます。それは古代エジプトに普及した化粧でした。はじめはお洒落のためではなく、魔除けよけのため、また目を保護するために使われたようです。古代人は、体の穴のあいた部分より悪魔が体内に入ると信じていたため、眼の縁を黒く塗り、悪魔を近づけないようにしたといわれます。耳飾りや鼻飾りも、魔除けの目的で発生したという学者もいます。

エジプトの太陽光線は強烈です。そのため眼の病気にかかりやすく、目薬が使われたのでしょうか。エジプトの像に目の縁が青緑色に塗られたものがあります。孔雀石の粉末で、当時最高の目薬と考えられました。

こうした実用的風習は、次第に女性のお洒落となります。高価な孔雀石の粉末にかわって、コールが使われるようになりました。コールは、アーモンドの種を黒焼きにした粉や、硫化アンチモンやマンガンが原料です。

アイシャドーをつける風習は、エジプトよりギリシャ・ローマ、そしてヨーロッパ各地へ伝わりました。日本に伝わったのは、いつ頃だったのでしょうか。「銀座

に、目の縁を青く隈取った女が出る、前代未聞なり」大正一三年の雑誌記事にはこうした記録がみられます。

エジプトの、目の縁を黒く塗る化粧法は、睫の化粧へと発展しました。エジプト女性は、金、銀、象牙でつくった細い棒にコールを練った化粧料をつけ、睫や眉毛の下の皮膚を、丹念に塗ったようです。この風習は、ギリシャやローマにはなぜか伝わりませんでした。しかし東方へは伝わったようです。

口化粧

古代エジプト女性が口紅をつけたかどうかは、異なった見解があります。「口紅をつけなかった」と主張する側は、口化粧が男性を引き付けるとは考えなかったこと。またエジプトでは、男女の接吻という風習もなく、口紅を塗って異性を引き付けることもなかったと理由づけます。

「接吻の風習は、古代インドからチベット・中国へ、西はアッシリア、シリア、ギリシャ、ローマに伝わりましたが、何故かエジプトでは受け入れられず、クレオパトラでさえそれを知らなかった」という指摘があります。

実際はどうだったのでしょうか。彼女は過去の人ですから、聞くこともできません。クレオパトラは、マーク・アントニーやシーザーという、時の政治家や軍神を相手にした恋愛のベテランでした。ですから接吻を含めた愛の奥技のすべてを知っていた、と私は思います。

Giovanni Tiepolo という、一八世紀のイタリヤの画家が描いた「アントニーとクレオパトラの出会い」という絵があります。アントニーがクレオパトラの手に口づけをしています。クレオパトラが接吻の風習を知らなかったとしても、彼女はアントニーからその手解きを受けたにちがいありません。

爪化粧

エジプト人は目の化粧に加え、爪にも化粧しました。エジプトのミイラのほとんどが、爪を赤く塗っています。この風習は、ギリシャ、ローマへ伝わりました。贅沢でお洒落だった上流階級のローマ人は、女性のみでなく、男性もマニキュアをしていたようです。

いつ頃中国から日本に伝来したかは不明ですが、江戸時代には口紅と共に、爪

にも濃い紅を塗りました。それは「端紅」とよばれ、江戸時代の本『女鏡』には「端紅は薄く塗るほうがよい」と記されています。その原料となったのは「紅花」で、当時栽培がさかんになりました。

マニキュアの伝統はインドやペルシャを含め、南アジア・西アジアに広く見られます。その染料は「ヘンナ」という、西アジア原産の白または淡紅・淡緑色の花の咲くミソハギ科の低木の葉と若い枝を粉にしたものです。それを湯で練って、爪に塗ります。ヘンナは、髪の毛や髭を染めるのに使われました。虱を殺したり、脱毛の防止にも役立ちました。また馬のたてがみを染めました。中近東では、ヘンナで手足に模様を描く風習があります。ヘンナによる化粧は、二・三週間すると消えてしまいます。ですから、そのつど新しく染めねばなりません。

入れ墨

その点、入れ墨や刺し傷は、皮膚に直接加工する装飾のため、消えません。入れ墨は全世界的な分布をもっています。ヨーロッパでは一世紀に、ローマ皇帝カリグラが、入れ墨をほどこしていました。中世には、聖地巡礼の教徒たちに、道

中倒れた際キリスト教徒として葬られるよう、顔や腕に十字架の入れ墨をしていた人がおりました。ポリネシヤやメラネシヤでは、装飾や氏族の標識となりました。

日本は入れ墨の技術の中心地です。江戸時代には、犯罪者の左手首に二本の筋を入れたり、額に入れ墨をしたようです。その後、装飾的な目的の入れ墨は関東を中心に発達しました。やくざのみでなく、一般の職人や商人などの間で広まりました。

アイヌの女性は成人に達すると、口の回り、手・腕などに入れ墨をほどこしました。かつては、沖縄でも、特に女性の間で行われていたそうです。これは、死後に往生安楽できるといふ信仰に結びついていた、といわれます。

日本では、平常体を露出している民族と異なり、故意に着衣を脱いで入れ墨を顕示するところに特色があります。遠山の金さんが、片肌を脱いで、入れ墨をみせる物語のクライマックスは、おなじみのシーンです。

入れ墨に似たものは、刺し傷です。ケロイド状の傷跡を拡大するために、何度も皮膚を傷つけねばなりません。刺し傷は、バンツ族の間で成人儀礼の一つとして行われています。傷跡を誇りとする心理で思い出すのは、かつてドイツの学生

仲間が決闘による傷跡を大きな名譽と考えた風習です。刺し傷をつける風習が古代にどれほど広く分布していたかは不明です。

香

マニキュアやヘナと共に古くから東洋にあった風習の一つは、香をたく習慣です。南国の香木を焚いて部屋や着物に香りをつける風習は、仏教の伝来と共に、日本へも伝わりました。

アラビアのような水のすくない熱帯地では、汗ばんだ体臭を消すために香料をたいて、その煙りのなかに身をおき、体に香りをつける習慣があります。

古代には、香の原料となった樹脂が、東方からバビロニア、アッシリア、エジプト、イエルサレムへと運ばれました。その貿易を支えたのは、紀元前一三〇〇年頃、飼い慣らされた駱駝です。

旧約聖書のマタイ伝は「東からきた博士たちは、家にはいって母マリアのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拝み、また宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬などの贈り物をささげた」としています。このイエス生誕のシーンは、クリ

スマスの子供劇で、よくとりあげられます。博士のささげたプレゼントの乳香と没薬。それは、化粧品原料ともなった香料でした。

乳香は英語では、frankincenseとよばれます。それは南アラビアの海岸地方や東アフリカのソマリランドに産するカンラン科の木の樹脂です。この木の幹に傷つけて、そこからうずきでる樹脂が、フランケンセンスです。樹脂は乳色をしているので、日本語では「乳香」と命名されたのでしょう。

乳香は、なめるとからい味がして、熱するとバルサムの香りがし、燃やすと明るい煙りを出します。それは寺院を清め、不快な匂いを消し、化粧品や万能薬の原料として使われました。これは今日も、アラビヤ半島の南西部から産出され、ほとんどがエジプトのアレキサンドリアで精製されます。この薫香料は非常に高価なため、警備の厳しい工場で処理され、労働者が工場から持ち出さないよう、退出時には厳しくチェックされるということです。

東方からの博士達が持ってきたもうひとつのプレゼントは、没薬でした。英語でmyrrhとよばれるこの香料の原産地もアラビア近辺で、トゲのある低木の樹液です。没薬は、ポルトガル語では「ミルラ」といい、日本には江戸時代に医薬品として伝わりました。

古代エジプト人は、こうした香料を処理する高度な技術をもっていました。それは神殿の一角にある工場で、神官により作られました。エジプト人は香をたいて神をたたえたのです。

香水は、フランス語で *parfum*、英語では *perfume*。これらの語源は、ラテン語の *fumare* (煙らせる) です。これからも、香水の起源は、香料をもやした古代の風習にあることがわかります。

ギリシャ人のお洒落

ギリシャでは、入浴したり体に香油を塗ったりする習慣がありました。そこに、エジプトから化粧法が伝わりました。化粧をはじめにとり入れたのは「ヘタイラ」とよばれた遊女達だったようです。彼女達は、顔や手のみでなく、乳首も赤く塗ったり、お尻にも化粧をしました。

ギリシャでは、女性の地位が高まり、家庭の女性が外出するようになる、化粧も広く普及します。就寝時に、ビューティーマスクをあてることもなされました。穀物の粗粉を練って顔につけ、翌朝ミルクでそれを洗い落とすという、今日

でいうパックのはじまりです。ギリシャの女性は紅を塗り、アイシャドウや眉墨をつけ、マニキュアとペディキュアをつけ、白粉を塗りました。化粧の中心地は、アテネです。

ギリシャの歴史家クレノフォンは、当時の化粧の有様を「夏に外出した女性の頬から汗がしたたり、赤い皺ができ、髪が顔にふれると、白粉で白くなる」と記しました。当時使われた白粉は、鉛白の白粉でした。そのため鉛毒にかかり、さまざまな悲劇がもたらされました。このように化粧品公害は、少なくとも二四〇〇年前からありました。

ローマ人の贅沢

ローマは、王制、共和制、帝制の道を歩みます。その間ローマ人は、地中海沿岸の諸地方を征服しました。征服地のひとつに、かってギリシャの植民地であった南イタリアのマグナ・グラエアがありました。ローマ人はギリシャ人から、お洒落や化粧法を学びました。

次第にローマ人の間で、髪を染め、紅をつけ、香料や白粉をつけることが流行とな

ります。哲学者や詩人などのおかたい知識人は、贅沢と浪費をローマの退廃と見なしました。「どら娘たちが、異国から輸入されたアクセサリーや高価な化粧品を買いあさり、どら息子たちは、昼から賭事に興じ、夜は酒宴にうつつをぬかしている」と嘆きました。ユーベナリスというローマの著名な風刺劇作家が、贅沢と浪費、物質欲、上辺のみを飾りたてたローマ市民に「健全なる精神は、健全なる肉体に宿る」とよびかけたのは、この頃でした。

ローマ時代の化粧品の特長は、いろいろなものを混ぜたことです。それは薬としての性格をも、兼ね備なえていました。何を混ぜたのでしょうか。インゲン豆、鉛白、蜂蜜、硝石、大麦の粉、薔薇の葉、茴香、ういきょう百合や水仙の球根、胡瓜、カボチャに加え、変わったものとしては、鰐の腸や牛の糞などがあります。インドでは牛の糞は、燃料として利用され、その灰は聖なる粉「ティノール」として使われています。

インドには、古代よりヒンズー教と結びついた、色々な化粧風俗がありました。もともとよく知られているのは、額の中央につける印でありましょう。「ティラック」または「ブトゥー」とよばれるこの点化粧の色や形は、本人の属するカーストや、地域により異なるそうです。私はインドで、僧侶よりこの印を額にいただく巡礼者を、沢山みかけました。巡礼者のなかには、顔や衣に神の名を描く人もいます。

インドの化粧は、こうして宗教と深く結びついたものでした。東洋では、ギリシヤやローマで化粧がさかんになる前から、色々な化粧風俗が存在しました。

芳香入浴

西暦一世紀頃には、ローマ人は文化生活を営んでおりましたが、ヨーロッパ地域の人々は「未開の生活」をしていました。現在のイタリアや北部、フランス、ベルギー、オランダ南部に住んでいたゴール族、そしてイギリスに住んでいた人々は、ローマの侵略を受けました。そしてローマ文化に浴します。

ローマ人は、古くより入浴を楽しみました。浴場に薔薇水を入れ、宴会場に放した鳩にも薔薇水をふりかけて香りを楽しむなど、贅沢をしたようです。ローマ人は占領地に、水道と共同浴場をつくり、入浴の習慣もそれにより伝播していききました。しかし、五世紀になると、ローマ人はイギリスから引きあげ、またフランスでは北方からサクソン族やフランク族がフランスに侵入し、西ローマ帝国は滅亡します。それと同時に文化の波も、潮が引くように消えていきました。

その後フランスには、西暦三世紀以後、イギリスでは八世紀の終わりに、キリ

スト教が伝わりました。初期のキリスト教指導者は「女性は肉体的誘惑を生み出す罪の源泉である」と見なしたのか、女性が入浴したり化粧したりするのを喜びませんでした。キリスト教の支配力は強く、化粧をはじめ、お洒落全般が女性の生活から影をひそめます。中世初期の暗黒時代が到来しました。

オリエンタル香水

西欧は文化的暗闇に入りました。しかし東方では、アラビア人がギリシャ・ローマの学問や技術をとり入れ、またインドやベルシャの知識や文化を吸収して、文明社会を確立していきました。アラビア人は蒸留法を考えだします。加えてかれらは、植物性の香料に動物性の香料を加えるという、ユニークな試みをしました。薔薇の花びらを蒸留してエッセンスをつくり、それに、麝香じゃこうと竜涎香りゅうぜんこうの香りを加えます。ここにオリエンタル香水が生まれました。

麝香は、麝香鹿の香囊から分泌される香料です。竜涎香は、抹香鯨の腸内に分泌する香料です。鯨が吐き出したものをアラビア人は手入し、微量を植物性のエッセンスに加えました。

ペルシャやインドの東には、中国文明がありました。ローマ人は、東方にすばらしい文明や豊富な天然資源があることに、早くから気づいていました。ローマ人の地図に北ではなく、東が上になっているものがあります。彼らにとって東の方位は、聖なる方位でありました。「東」すなわち「オリエント」は、今日「オリエンテーション」の語としても、生きています。

この、オリエント文明の東端に位置していたのが日本です。中国で隋が天下を統一した頃、日本では聖徳太子が集権国家を確立しました。はじめ遣隋使が中国へ遣わされ、追って遣唐使が幾度か大陸へ渡ります。彼らは、中国の多くの文化事物を都に持ち帰りました。衣服・書籍・家具・薬品・食料に加えて、化粧品もふくまれていたことでしょう。

当時、中国の宮廷で卓越していたのは、白化粧でした。しかし、日本では赤化粧の伝統が強く、祭礼事を除いては、白化粧はなかなか日本人の間に浸透しなかったといわれます。特に奈良時代には、健康的な生き生きとしたものが憧れだったのでしょうか。万葉集の歌は明るく、化粧も鮮やかな赤さというものが好まれたようです。当時の宮殿の軒は浅く、外から光が入りくる明るい室内で、生活をエンジョイした万葉人の姿があったはずで

奈良朝の宮廷女性は、中国の白化粧を広くとり入れませんでした。ただ眉の化粧は、取り入れたようです。その代表的なものは、蛾眉がびという眉形です。正倉院収蔵の屏風絵に「樹の下に立っている女性」の絵があります。ここに、中国の蛾眉の特長がみられます。昆虫の蟻の触覚のように、眉毛の左右両端の眉尻は太く、上へりは整った半月形の曲線をなしています。蛾眉を持ち豊かな頬を持つことが、奈良朝女性の憧れだったのでしょうか。上へりを鮮やかに整えるために毛抜きで毛を抜き、そこに眉墨を塗り下の方をぼかすのが、眉の化粧法です。この化粧法は、平安朝になると、眉を全部取ってしまったて、そのあとに眉墨を引く風習に移っていきます。

平安朝に入ると遣唐使は廃止され、中国との国交は直ぐにうすれます。それと前後して、日本の宮殿建築に変化がもたらされました。檜皮拭きの、軒先の深い大きな建物が造くられるようになります。このため、建物内は、昼間でさえ薄暗くなりました。また、空間を仕切るのに衝立が使われました。そのため室内がさらに暗くなりました。そうした薄暗い場所では、白い顔をした人がひきたちます。ここで日本人は、白を基調とした化粧に興味をもちだしたのでしょうか。

肌の白さというのは相対的なものですが、日本人の自然の地肌ではありません。

そこで白粉が使われます。粉末の白粉は直ぐ落ちてしまいます。そのため吸着性と伸びを助長するへちま水で溶いて、顔に塗りました。もっと目立ちたいという人は、幾重にも塗る厚化粧をしたのでしょう。

厚化粧をするために一番邪魔になるのは眉毛です。解決策は眉毛を剃り落とすことです。そうしても毛根は残りますから、白粉がきれいにつきません。そこで眉毛を抜くことになりました。加えて額の生え際も、毛を抜いて揃えました。そうした下ごしらえをして、へちま水で溶いた粉末の白粉を象牙の篋で、顔の下方から上方へと塗りました。貴族が使ったのは「ハラヤ」とよばれる、水銀系の伸びのよい着色白粉です。大衆はそうした高価な者は使えなかったので「ハフニ」という酸化鉛の白粉を使用しました。

白粉を塗った顔の目のずっと上に、引眉を描く風習が生まれました。引眉は、年令や身分によって引き方が違うといわれますが、私は詳細を知りません。ただ今日でもよくお祭りで、引眉の名残りを見かけます。神社のお祭りに参加する子供達のなかに点眉をつけた姿をみかけます。ただし持ち前の眉は剃らず強調し、さらに点眉をその上につけるので、二重眉となっています。

平安朝の口化粧は、顔全体に白粉を塗ったあと、唇のまん中だけを拭き取った

り、口紅を好む形に塗ったりしたようです。こうした化粧法は、今日も芸者さんの口化粧に残っているようです。

白粉は、非常にメッシュの細かいものでしたが、それでも乾燥するとひびが入ったり、剥げ落ちたりしました。そこで平安朝の女性は、なるべく口を開けないように、人前でガツガツ物を食べないように、また大げさに笑ったり泣いたり、哀しみの表情をしないようにするのが嗜みとなったとされます。

この頃、地位の高い婦人達が「あこめおうぎ」という大きな扇で、顔を隠す習慣が生まれました。大げさな表情をすると、白粉がおちる危険があります。ドラマティックな喜怒哀楽に対面しないように掲げるための扇であったとされます。日本人の女性は今日でも、笑うときに手で口を被うという動作をします。これは、白粉が充分な粘着性を持たなかった平安時代から続いてきた、仕種の名残りなのでしょうか。

平安の白化粧は女性のみでなく、男性もこれを真似、男女共通の貴族化粧となりました。それは、京都を定期的に訪づれた地方の役人・国司を介して、地方へと伝播しました。平安朝に続く鎌倉政権は、質実剛健の気風が尊ばれた時代でした。そのため白化粧はひろまりませんでした。しかし足利政権が京都に幕府をも

つと、公家から影響を受けた地方武士が、白化粧をして戦場に向かうこともあったようです。戦国乱世には、敵に首をとられた時、みっともなくないう眉墨を引いたり、白粉を塗った武士もいたようです。その後白化粧は公家社会で続きましたが、秀吉が天下統一したのち形をかえ、女性中心のものとなりました。

桃山時代からはじまったのは、鼻の上を白くして他は紅色の白粉をぬる化粧です。これは後の日本の化粧の主流となります。色を入れた化粧は上方から江戸へ、芸者衆から一般商家や侍の女房へと広がっていきました。明治維新後、西洋から色のついた白粉が入ってきます。その頃には、それを受け入れる、化粧土壌が日本には培われていました。

薔薇水

日本では、このように白粉を主とする化粧が発展しましたが、その間外国からの化粧品も導入されました。その一つは「薔薇水」とよばれる化粧水です。長崎の出島のオランダ人達が、その導入者です。薔薇水は、先にふれましたように、ヨーロッパで古来より使われた化粧水です。

しばらく、お洒落や化粧が影を潜めていた西洋に、変化をもたらした要素は、十字軍です。オスマントルコに占領された聖地エルサレムをとりかえすため、ヨーロッパ諸国が十字軍を送り出します。一一世紀から一三世紀にかけてのことでありました。ヨーロッパの騎士達は、文明度の高い東方の国々を遍歴するうちにだんだん垢抜けして、礼儀や素養を身につけるようになりました。そして、祖国の女性を喜ばせるようなダマスカスの織物や、東方の化粧品や香料をもち帰りました。

それらのなかには、キプロス島からのシプルや薔薇水もふくれていました。食後に手を洗うのも、その用途の一つです。今日我々の使うフォークは、一五世紀頃はじめにイタリアで使われました。イギリスには一七世紀に伝わります。それ以前は、食物を指でつまんで食べていましたから、食前食後に薔薇水で手を洗うことが上流社会の食卓作法であったわけです。

化粧ルネッサンス

教会の束縛がゆるんで女性達が化粧を شدしたのは、ルネッサンスⅡ文芸復興がいちはやく始まった、イタリアでした。その中心地は、中世のフィレンツェやローマ、そして東方諸国との貿易によって富を蓄えたベニスです。

化粧品を使わなければ美しくなれない、という考えが一般化しました。化粧をしない女性は、余程変わり者と考えられました。女性の美しさをたたえた文学・絵画、そして化粧法を説いた本も出版されます。化粧品の普及にともないその需要がたかまると、東方からの輸入だけではまかないきれなくなります。ベニスやゼノアの薬剤師や香料商のなかに、原料を取り寄せ化粧品を製造する者が現れました。

仏・英への伝播

イタリアのこってりとした化粧法は、一六世紀になると、フランスやイギリスに伝わります。イタリア風のお洒落をフランスに伝えた貴族の一人は、一六世紀

にフロレンスの都市貴族メディチ家から、後のアンリ二世の妻として嫁いだ、カトリーヌ・ド・メディチです。彼女はフランスの宮廷に、香料、化粧品、シャーベット、リキュール、パラソル、ハイヒール、仮装舞踏会といった、ハイカラな事物や風俗を紹介しました。

一六世紀になると、イギリスに化粧法が伝わります。お洒落の筆頭は、エリザベス一世です。繁栄したイギリスを統治した彼女の贅沢には、金に糸目がなく、外国の流行品と化粧品をとめどなく取り入れられました。女王は厚く白粉を塗っていたので、その感情はくみ取れなかったと伝えられます。

女王の化粧法は、宮廷の他の女性へと浸透しました。こうして念入りに顔をつくるさまは、一七世紀のはじめに「メイク・アップ（メイキャップ）」という英語のことが生まれるきっかけとなりました。

化粧と共に、付け黒子、お面、マフラーなどお洒落の道具立てが拡がりました。一六世紀には、プロの美容師が多数生まれました。かれらの仕事は、皮膚に静脈を描いたり、眼をパッチリと引立てたり、髪の毛を染めたり、頬を赤くしたり、胸を硫黄で白くしたり、歯を白く染めたりすることでした。

化粧水

一八・一九世紀になり、蒸留法が一般化すると、さまざまな花の精油・オットーが作られるようになります。アーモンド、茴香、西洋松、シトロン、胡瓜、ユーカリ、ホップ、ラベンダー、レモン、はっか、オレンジ、アイリス、薔薇、サルビヤなど、いろいろなオットーが造られました。これらと前後して、今日の化粧水の源ともいわれる「ハンガリー水」が生まれました。これは、アルコールに南欧原産の薬用芳香植物のエッセンスを加えたものです。しかし、それは、一八世紀半ばに登場したオーデコロンに王座を奪われます。

オーデコロンの起源は、はっきりしません。一説に、ポール・フェミニというイタリア人により、ドイツの都市ケルンで調合されたのがはじまりと言われます。主成分はイタリアの柑橘油、橙、レモン、ベルガモットにラベンダーを加えたものです。それはハンガリー水のように単一の香りではなく、いろいろの香りを調合した点で画期的なものでした。

はじめ、この化粧水には「ケルン水」というドイツ名がつけられました。しかしイギリスやフランスのお洒落な連中には受容されず、フランス語で「コロン水」

に改名されます。ドイツの町ケルンは、フランス語で「コロロン」。「オー」はフランス語で水。従って、「オーデコロロン」は「コロロンの水」すなわち「ケルンの水」という意味です。

コロロン水は、七年戦後でケルンの町に駐在したフランス兵の間で特に評判となり、彼らは母国にそれをひろめます。歴史上に名高いオーデコロロンの愛用者は、フランスの皇帝・ナポレオンです。ナポレオンは、オーデコロロンを首や肩にふんだんにふりかけ、毎月六十本もの瓶を空にした程の愛用者でした。ウォータールの戦いに敗れる少し前、ナポレオンはフランスの香水商の老舗 Houbigart chardin に沢山のオーデコロロンを注文しました。この会社には、ナポレオンからの注文書と彼が使っていた香水入れと香炉が大切に保管されています。

新大陸の発見、交通の発達、美的観念の向上、経済力の増加など、種々な要因により、化粧は近世になると急速に全世界に普及しました。

化粧行為

我々は美容のためのみでなく、色々な機会に様々な目的で化粧をします。自然環境から身を守るため、宗教的目的のため、快楽のため、個性や地位や身分を顕示するため、敵から身を隠したり敵をおどしたりするため、職業上の理由で、異性の気を引くため、スポーツや芝居やお祭りに際して、自己満足のため、衛生のためと、その理由もいろいろです。人の誕生、結婚、死という人生の通過儀礼にも化粧はかかせません。

化粧の対象となる体の部分や、化粧法もまちまちです。顔・手・足・体・爪・髪に、いろいろな粉・液体・軟膏をふりかけたり、塗ったりする。これは世界に普遍的な人間行為ですが、時と場所によりその内容はまちまちです。

化粧をすること。それは人を単なる「生物としての存在」から、思考し、創作し、美を追求する「人間」としての意識を高めるものといえそうです。化粧は、地理学をたしなむ者にとっても興味ある文化行為です。

むすび

今日は「化粧」というテーマを、人の身体に結びつけておはなしました。ただ、我々個人の存在は、ちっぽけなものです。ある場所に生まれ、その生活環境のなかで生き方を学び、喜怒哀楽を体験して消えてゆく流れ星でしかありません。ですから、個人の化粧を限られた視野でみなせば、はかない一時的な行為といえるかもしれません。

しかし視点をかえれば「肌を保護する、美しく粧おう」という、化粧のテーマは、環境保護という問題にも結びつきます。熱帯雨林の皆伐、砂漠化の進行、水源地の枯渇、オゾン層の破壊、地表のコンクリート化という現象は、急速に進んでおり「地球の素肌を保る」ということは、人類に課された「化粧行為」といえましよう。

また、ここ京都の住人にとっての身近な問題の一つに、「未来に向かっての京都町づくり」という課題があります。化粧というテーマから、皆様が「京都にふさわしい町化粧」への関心をもさらに深め、この美しい都市を明日にむかって発展させて下さることを祈って、今日の私のつたないはなしに終止符をうちたいと思

います。ありがとうございました。

（講演はスライドを使用して進められましたが、ここでは画像は省略しました。またスライドなしでは理解しにくいコメントも割愛しました。）

発表を終えて

今年縁があって、日文研で4ヶ月間お世話になりました。ここで体感した大きな喜びのひとつは、出会った学者の多彩な研究活動にふれ、己の見識の枠をさらにひろげる重要性を再認識したことです。フォーラムの場で、京都市民の皆様と「対談」させていただくにあたり、最近の研究の副産物のひとつとして興味をもった「化粧」を選びました。このテーマは、私にとっても、またコメントーターとなってくださった旧友の千田稔教授にとっても、それぞれの研究筋から少々離れたものでした。我々にこうした小さな知的探検の「学びの宴」をはらせてくださった日文研フォーラムの支援者と参加者の皆様に、深く感謝いたします。



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレックスandro・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラル・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシュ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考－『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④8	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 －技術移転をめぐる－」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間－北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリアー美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 －科挙制度をめぐって－」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り－平安朝文学の特質－」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウオ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミターージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミターージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹璠 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦4	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦7	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦8	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「－日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧0	7.12.19 (1995)	タチャーナ L. ソコロワ=デリュシナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前記に来日した中国人の外交官たちと日本」
91	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
92	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
95	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟 - 解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 - なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界 - 三井高房『町人考見録』を中心に -」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・ 日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9 (1997)	ポーリン ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア ウィリアム グーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア モネ Livia MONNET (スイス・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール モスク Carl MOSK (アメリカ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田 欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・ブリティッシュ コロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼まで—狂言役者の修行」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」
104	10. 2.10 (1998)	高 文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者—一休宗純とその文学」

105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才ー語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ ジョーンズ (インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間にー金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩108	10. 6. 9 (1998)	島崎 博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘 培培 (米国・バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ー 詩的イメージとしての典故 ー」

○は報告書既刊

発行日 1998年9月15日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合せ先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

1998 国際日本文化研究センター

■ 日時

1998年6月9日 (火)

午後2時 ~ 4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

